

# サンスクリット事始め

——明治の求法僧——

長 崎 法 潤

皆さん、おはようございます。本年度もたくさんの皆さん方を仏教学会の会員としてお迎えすることになり、大変嬉しく思います。皆さん方を心から歓迎申し上げます。

本日は歓迎講演会ということで、皆さん方に何か話をしろということでございます。火曜日の一時限目、皆さん方にとって大切なサンスクリット文法の授業をつぶして、このような仏教学会の歓迎会を催したわけでありますので、サンスクリットの勉強を始めたばかりの皆さん方が何か興味をひくお話ということで、「サンスクリット事始め」という講題をつけさせていただきました。皆さん、メモなど取らなくても宜しいです。われわれの大先輩の中に、サンスクリット研究に青春の命をかけた一人の学徒がいたことをお話し、皆さん方が、大谷大学で仏教やサンスクリットを学ぶための励みにしていただければと思います。

今から三十年くらい前になりますが、私は若いとき、昭和三四年から三九年まで、インドのナーランダに留学していました。ナーランダは、七世紀に玄奘三蔵が中国からインドに求法のために行きまして、七年間学んだ、学問寺のあったところです。現在は学問寺の広大な遺跡がありますが、そこから大きな池をへだてたところにナーランダ仏教研究所がありまして、私はそこで四年半の間勉強いたしました。

研究所には小さなライブラリー——大谷大学のような、大きな図書館ではありませんけれど——非常にこじんまりとして、しかも、大変いい本が集まっている図書館があります。私は滞在中、非常によくその図書館を利用させていただきました。

ある日、私はその図書館で書架にいらんだ本を見ていたとき、一冊の書物に出会いました。それを手にして読んでみました。実は、その書物が、今日皆さん方にお話しようと思っていることと深い関係があるのです。それは、オックスフォードから一八八五年に出版された書物でありまして、マックス・ミュラー先生とヴェンツェル先生のお二人が編者になっております。その本の名前は次のようになっています。

*The Dharmasamgraha, An Ancient Collection of Buddhist Technical Terms, prepared for publication by Kenjiu Kasawara, A Buddhist Priest from Japan, and after His Death edited by F. Max Müller and H. Wenzel* (Oxford, At the Clarendon Press, 1885).

これは、サンسكريットで書かれた『ダルマサングラハ』の校訂出版であります。漢訳では法集名数経といい、仏教術語を集成したものであります。日本からオックスフォードに勉強のために行った Kenjiu Kasawara (笠原研寿) が校訂出版の準備をしたのですが、彼が若くして亡くなったので、彼の死後、両先生が編集して出版したのがこの書物であります。

ナーランダ仏教研究所の図書館で、この書物の序文を読みました。マックス・ミュラー先生が次のように書いておられます。

「ダルマサングラハのテキストのこの版——註、索引付——は、最も誠実で、勤勉で、温雅な仏教僧、笠原研寿君による永久で不巧の著作となるであらう、と私は思うのである。彼は一八七六年に英国に来て、一八七九年から八二年まで、私のもとでサンسكريットを学んだ。そして彼は、祖国に帰って間もなく、一八八三年に亡くな

ったのである。

私は、自叙伝 (*Biographical Essays*, Longmans, 1884) の中に笠原研寿君と彼の学友である南條文雄君について記述している。自叙伝をたぶん読んだことのないサンスクリット学者に、この有望な学徒がどのような人物であったかということについて、わかっていただくために、ここにその文章の數行を引用しておきたい。」

マックス・ミュラー先生は、序文の最初にこのように述べ、次に自叙伝から笠原研寿さんをたたえる言葉を引用しておられます。

「オックスフォードにおける笠原君の日常は非常に單調なものであった。彼はいかなる娛樂もなく、ほとんど運動もしなかった。タバコも酒も飲まず、小説も新聞も読まなかった。彼は毎日毎日研究を続け、時には誰とも会わず、私と彼の学友南條文雄君以外には、誰とも話さなかった。

彼は英語を正確に話し、書いた。ラテン語を学び、少しフランス語を学んだ。また、歴史や哲学に関する古典の英文書を学んだ。彼は、日本に帰国後、最も役に立つ人物となったであろう。なぜならば、彼はヨーロッパ文明における良さをすべて理解したばかりでなく、一種の国民的なプライドを持っていて、單なる西洋の模倣者とはならなかったであろうからである。彼の態度は申し分がなかった。つまり、それは、利己的でない人にそなわった自然の態度であった。彼の性格については、私は長い間彼を見てきたのであるが、陰險なずるさを彼には一度も見出すことがなかった、と言えるのである。過去四年間に、オックスフォードには、この故人となった仏教僧よりも高潔で高尚な魂の持主が学生の中にいたかどうか私は疑念を抱くのである。仏教こそまさに、このような人物を誇りとすべきであろう。」

自叙伝からの引用はさらに続きますが、私は、自分の愛弟子の一人である笠原研寿さんをたたえるマックス・ミュラー先生のこの文章をナランダーで読み、感動しました。數日の間、その感動が続きました。自分の部屋で勉強して

いるときも、夕方日が落ちて、ナールンダ大学遺跡を散歩するときも、その感動に浸りました。そして、南條、笠原両学徒とマックス・ミュラー先生との出会いは、玄奘三蔵が中国からはるばるナールンダの学問寺を訪ね、シーラバドラ（戒賢）法師と出会ったことと大変よく似ているように思いました。

ところで、マックス・ミュラー先生が誉めたたえる笠原研寿という学徒についてですが、一八五二年、つまり嘉永五年の五月五日に富山県の城端に生まれております。北陸線の高岡から城端線に乗り換え、その終点が城端であります。破波平野の一番奥のところで、立山連峰につらなる山々の近くにある静かな町です。笠原研寿さんは、そこにある大谷派のお寺で生まれました。

笠原さんは、明治九年（一八七六年）に、二五才のとき、南條文雄さんと一緒に大谷派から派遣されて英国に留学しました。南條文雄先生につきましては、大谷大学の学長になっておられますので、皆さんよく御存じですが、笠原研寿さんのお名前については、あまり聞くことがありません。若くして亡くなったために、笠原さんのことは、なかなか耳に入ってきません。南條、笠原両青年はイギリスのオックスフォードで、マックス・ミュラー先生のもとでサンクリットを学んでいましたが、笠原さんは体を悪くし、胸を患って、やむなくオックスフォードから日本に帰ってきました。六年間イギリスで勉学し、三一才の時帰国し、翌年、三二才という若さで亡くなりました。オックスフォードで行なった研究の成果を公にすることなく亡くなったのです。マックス・ミュラー先生は、弟子の研究成果の一部である『ダルマサンクラハ』の校訂本を編集して出版し、その序文で弟子の笠原研寿さんのことを絶賛したのです。新聞も小説も読まず、酒もタバコも飲まず、ただ一心にサンクリットの研究に捧げた弟子のことを、「過去四年間に、オックスフォードには、この故人となった仏教僧よりも高潔で高尚な魂の持主が学生の中にいたかどうか私は疑念を抱くのである。仏教こそまさに、このような人物を誇りとすべきである」と、マックス・ミュラー先生がたたえています。日本から、そして大谷派から、このような学徒をイギリスに送ったということは、われわれにとっても

誇りであります。高名なマックス・ミュラー先生が絶賛する学徒がわれわれの大先輩の中にいたということは、われわれの誇りであります。

私は二年前に、大谷派の安居で次講をつとめさせていただきました。安居という講座は、毎年七月下旬に大谷大学を会場にして開かれています。私のときは赤レンガの建物の教室で講義をしました。その講義の時に、私は笠原研寿さんのことに言及し、マックス・ミュラー先生が絶賛していることについて話しました。その日の講義が終り、控室で休憩していますと、受講している一人の年輩の方がやって来られ、このようにおっしゃいました。

「実は私は、笠原研寿の曾孫であります。さきほど先生が笠原研寿の話をなさいましたが、それを聞いて大変嬉しく思いました。」

笠原研寿さんの曾孫にあたるこの方は、内村哲さんという富山のお寺の方であります。以前、新聞記者をしたりして、お寺のことは何もできなかったのですが、この年になって、仏教を学ぶために、毎年の安居に出席しているとのことでした。そして、内村さんは、

「一度、ぜひ笠原研寿碑のある城端にご案内したいと思えます。」  
と、おっしゃいました。私は大変有難く思いました。

その年の初秋に私は富山県の高岡に行く機会がありました。前もって連絡しておきますと、内村さんが私を迎えに来て下さいました。息子さんの運転する車で、城端まで案内して下さいました。砺波平野を一時半くらい車で走り、立山連峰につらなる山々が目の前に近づく、城端の町に入りました。

城端は、大谷派の城端別院善徳寺の門前町として発達しました。大変大きな別院は、蓮如上人の創建ですが、その別院の山門のすぐ前に笠原研寿碑が建っております。「笠原研寿碑」の五文字は現如上人が書かれた篆書であります。その下に、南條文雄先生が漢文で書かれた記念碑があります。

マックス・ミュラー先生のあの絶賛の言葉を思い浮かべながら、私は笠原研寿碑を拝しました。それから、別院のすぐ横にある、笠原研寿さんが生まれた恵林寺に参り、本堂でお参りさせていただきました。内村哲さんのご母堂様は恵林寺の生まれです。前住職の笠原保寿師とは従兄弟の關係になります。富山に出て、笠原研寿さんを偲んで一杯飲もうという話になりました。恵林寺の前住職さんと内村さんと私と三人で富山まで車で行きました。その夜一時ごろまで、笠原研寿さんの話をしながら酒をくみかわしました。笠原研寿さんは、もともと大変酒の好きな方であつたそうです。イギリスに発する前は本当によく酒を飲んでおられたようです。しかし、酒をつつしんで、オックスフォードではサンسكريット研究に専念されたのです。従兄弟どうしのお二人もなかなかの酒豪でありまして、研寿さんを偲ぶ話はいつまでも尽きることがありませんでした。内村さんは、悲しいことに、昨年お亡くなりになりました。おそらく、お浄土で研寿さんと語りあつておられることと思います。

話は多少前後しますが、南條、笠原両学徒の洋行の様子について、南條文雄著の『懐旧録』（東洋文庫三五九、平凡社）によって辿つてみたいと思います。

笠原研寿さんと南條文雄さんの二人は、明治九年六月十四日に横浜の港を出発しました。これは、大谷派の厳如上人の命で出かけることになつたのです。当時、洋行するなどということは大変なことでした。もし厳如上人がこの二人をイギリスに留学させることが公になったら、どこから横やりが入るかわからない。そこで出発のぎりぎりまで二人の洋行を伏せたとのことです。笠原さんは二十才頃から京都に出て、本山の寺務所で役についていました。南條さんも京都に来て、笠原さんと机を並べて仕事をしていました。厳如上人は、この二人ならば、イギリスに行つて、まだ日本に伝えられていない仏教の原典、サンسكريットの学問を日本に伝えてくれる人だと思われ、二人をイギリスに留学させることになつたわけです。出発のしばらく前から南條さんは東京の浅草別院に勤めを移されておりました。

笠原さんは京都におられました。二人の洋行については全く公にされないままで、二人は明治九年（一八七六年）六月十四日、横浜の港から留学の途につきました。

今とは違ひまして、当時は日本からイギリスまでは大変な長旅でした。六月十四日に出発した船は、最初に香港に寄り、そこで一週間ほど碇泊し、次はサイゴンに寄りました。その船はフランス船であったので、フランス領であるベトナムのサイゴンに寄ったのです。サイゴンを発ち七月一日にシンガポールに着いております。次に、スリランカのコロomboに七月八日に着いております。それからアラビア海に出まして、紅海に入り、スエズ運河を通っております。当時はスエズ運河が開通したばかりでした。そして地中海に船が入りまして、イタリアのネーブルス、すなわちなポリに寄港したのは、七月二十九日でした。それから八月一日にフランスのマルセイユに着いております。横浜を發つて、一ヶ月半かかってマルセイユに着いております。大変な長旅でした。マルセイユから、当時はすでに鉄道が通っていましたので、パリまで列車で行き、パリで数日滞在しました。二人がパリを發つて、ドーバー海峡を渡つて、ロンドンに着いたのは八月十二日であります。日本を發つて約二ヶ月かかっています。

ロンドンに着いた南條、笠原の二人の青年は、まず英語の勉強を始めます。当時、日本では、二人に英語を教えるような人がいなかったのです。出発前には英語を全く勉強していなかったのです。二人はロンドンで同じ家に下宿して、二年半ほど英語の勉強を徹底的にやりました。

ロンドンに着いたとき、笠原さんは二五才、南條さんは三つ年上の二八才でありました。笠原さんは非常に融通のきかない真面目な性格であつたようです。ところが南條さんは、いろいろなことに興味を持っておられました。南條先生の『懐旧録』の中に、まだ英語も解らない頃、笠原さんを誘つてシェークスピア劇を見に行ったことが記されています。

「十月のことであつたと記憶しているが、当時ロンドンの名優ヘンリー・アーヴィングがシェークスピアの作で

ある「ヘンリー八世」の演劇をするに聞いたので、笠原君はあまり進まなかったようであるが、私は小さい時分から芝居が好きであつたので、たつて笠原君を誘ひ合せて、その見物に出かけたのである。まだ英語を聞きわけける力は乏しかったが、舞台における俳優の所作くらいはたいいその意を解しうるだろうという大胆な見当をつけて出かけたのだつた。」『懐旧録』一〇二頁

八月十二日にロンドンに着いて、十月といひますと、まだ二ヶ月くらいしか経っていない頃のことです。ロンドンでは芝居が始まる時間が大変遅いのです。南條さんは非常に興味を持つたらしく、最後まで観て、芝居がはねたとき、もう夜中になっていました。それほど遅くなるとは考えていなかったようです。下宿に帰って、入口のベルを鳴らしても、いっこうに家主が起きてくれませんでした。もう真夜中のことであるので仕方なく、南條さん、笠原さんの二人は、ロンドンの夜の街を、公園をぶらぶら歩いたり、街を歩いたりして、朝まで過ごしました。やっと夜が明けたので、下宿に帰ったけれども、朝帰りの理由を家主に英語で言えなかったそうです。そこで、下宿の入口を開けて入るなり、まず自分の部屋にあがって、二人で辞書を引き引き、朝帰りの理由を英語で書いて、家主に渡したのです。このように、最初はほとんど英語も解らず、困ることが多かったと思います。

ロンドンでの二年半が過ぎ、英語力もかなりついたので、二人は、明治十二年（一八七九年）二月二八日にオックスフォードに移りました。オックスフォード大学教授のマックス・ミュラー先生のもとでサンスクリットを学ぶためです。

マックス・ミュラー先生（一八二三—一九〇〇）は、ドイツ生まれですが、ベルリンとパリで学び、一八四七年にイギリスに渡り、一八五〇年よりオックスフォード大学の教授として活躍された方です。南條、笠原の二人が訪ねた頃、すでにインド学、比較言語学、比較宗教学の権威でありました。『リグ・ヴェーダ』の校訂（六巻本、一八四九—七五）、『ウパニシャッド』の翻訳（全二巻、一八八四）など、インド学の広い分野にわたって偉業をなしておられます。

から『東方聖典全集』(Sacred Books of the East) 五〇巻の編集もしておられます。先生はまた、『宗教学概論』(Introduction to the Science of Religion, 1873) を著わっていますが、「宗教学」という学名を用いた最初の書物であります。先生は、インド学、インド古代宗教の研究から出発して、比較言語学、比較宗教学の研究をされ、比較宗教学の創始者の一人でもありました。

南條、笠原の二青年は、マックス・ミュラー先生のもとでサンスクリットを学ぶために先生を訪ねました。すでに申しましたように、マックス・ミュラー先生は研究にお忙しい方でありました。先生は最初から、「わしが教える」とはおっしゃらなかったようです。先生はマクドナルドという若い方にサンスクリットの手ほどきをしてくれるように依頼しました。マクドナルドという方は、皆さんもサンスクリット文法の授業でお聞きになったかもしれませんが、サンスクリットの文法書、辞書等で有名な学者であります。しかし当時はまだ、大学の教員ではなかったようです。大学院の学生ぐらいであったと思います。そのマクドナルドから、南條、笠原の二青年はサンスクリットの手ほどきを受けたのです。おそらく毎日、あるいは一日おぎくらしいに徹底的に教えてもらったと思います。九月で文法を一応終っております。いよいよ目的のサンスクリットの学習ですから、南條、笠原の二青年も勉強に励んだと思います。しかし、サンスクリットは難解な言語ですので、二人は大変苦しんだことと思います。

年があらたまって明治十三年(一八八〇年)一月から、マックス・ミュラー先生が直接サンスクリットの指導をすることになりました。マックス・ミュラー先生は五七才の時であって、最も多忙な頃でした。文法を終わったばかりの南條、笠原の二青年に対し、最初はどうにもならない苛立ちを感じたことでしょう。先生も忍耐をもって教えてくださったようです。最初は『無量寿経』の梵本を読みました。『阿弥陀経』の梵本をも読みました。それから『金剛経』の梵本を読みました。一日おきにマックス・ミュラー先生の家に行って読んでもらった、と南條先生は書いておられます。笠原研寿さんは、もちろんサンスクリットを一生懸命に勉強しましたが、西洋の哲学にも興味を持っていました。

て、カントの哲学書を英訳で読み始めていました。このようにして、一日おきにマックス・ミュラー先生の個人指導をうけ、南條、笠原両青年は懸命の努力によって困難を克服し、サンسكريットの力をつけることができました。

明治十四年（一八八一年）九月、ドイツのベルリンにおいて万国東洋学士会議という名称の学会が開かれました。東洋学の国際学会であります。この学会にマックス・ミュラー先生はもちろん出席しますが、オックスフォードからマクドナルドさんなど沢山の学者が出席するので、是非、南條、笠原の二人も一緒に出席するようマックス・ミュラー先生が要請しました。そこで二人はベルリンに行くことになりました。ベルリンでは数日早く着いている先生と同じホテルに宿をとりました。

万国東洋学士会議は、一八七三年に第一回の学会がフランスのパリで開かれています。この学会は現在も続いておりまして、現在は国際アジア・北アフリカ人文科学会議 (International Congress for Asian and North African Studies) という名称になっております。その第三一回の学会は、一九八三年八月三一日から九月七日まで、東京と京都で開かれました。第三二回の学会は、一九八六年八月二五日から八月三〇日まで、ドイツのハンブルグで開かれました。私は第三一回と第三二回の学会に参加しております。第三三回の学会は、今年八月下旬、カナダのトロントで開催されることになっています。百十数年という、これほど歴史のある国際学会は他にあまり例がないと思います。ところで、南條、笠原の二学徒が参加したベルリンにおける一八八一年の学会は、この学会が始まって間もない頃であります。マックス・ミュラー先生は、将来、学者として有望な二学徒にとって、この学会の参加は大きな意義を持つと思っておられたのであります。

学会は一週間くらいで終わりました。今度はマックス・ミュラー先生と一緒に二人はベルギーを通り、パリまで旅行しました。パリに行った目的は、パリの国立図書館にある古いサンسكريットの仏典を書写するためであります。二人が写本を書写するために、マックス・ミュラー先生が特別にパリの国立図書館に頼みこみ、その上、日本大使館

が保証人になったと南條先生が書いています『懷旧録』一三六頁。貴重な写本を借り出すために、日本大使館の保証まで必要であったのです。『翻訳名義大集』(Maha-nirvāṇa)の二大冊、アシ ヴヴァゴーシャ(馬鳴)の『仏所行讃』(Buddhacarita)の梵文写本を二人で分担して終日謄写しています。その他『入楞伽經』『金光明經』の抄写などを行なっています。

数年前、私はバリの国立図書館を訪ねたことがあります。南條、笠原の両学徒が訪ねた時にあった同じ建物が現在もそのまま使われています。写本資料室にも特別に入れてもらいまして、南條、笠原の両学徒が書写した梵文写本を直接見せてもらいました。寝食を忘れて写本の書写に専念する二人の姿を思い浮かべ、大変懐しく思いました。

二人は三週間、不眠不休で書写しました。マックス・ミュラー先生もその間、二人の書写を見守っておられたようです。南條、笠原の二人は、まだ日本仏教に知られていないサンスクリット仏典を日本に伝えたいという使命感に燃えていたのですが、マックス・ミュラー先生は二人の使命を理解し、その使命の実現のために力を尽くしてくださいました。二人の使命感をマックス・ミュラー先生も共有されたと言うことができるかもしれません。

十月に入って二人は先生とともにオックスフォードに帰りました。その二日後、南條、笠原の二人はケンブリッジに行き、ケンブリッジ大学所蔵の梵本を借りて、パリで書写した『仏所行讃』を校合しています。使命感に燃える二人のその時のことについて南條先生は、

「今日から回想してみると、この当時ほど緊張したことはない。文字どおりの不眠不休で、全く寝食を忘れての研鑽であつた。」「懷旧録』一三七頁」

と、書いています。二人は、サンスクリット原典を日本仏教に伝えるという大きな使命感に燃えていたのです。

笠原研寿さんは、さらに、マックス・ミュラー先生をお願いして、バリの国立図書館所蔵の『阿毘達磨俱舍論釈』(Abhidharma-kosa-syākhya)をオックスフォードに借り寄せ、その書写にかかりました。これは、ヤシヨミトラ(称

友)が書いた注釈でありまして、漢訳には伝えられていないので、日本仏教には知られていません。日本における俱舎論研究にとって、多大な価値のある註釈であります。

『俱舎論釈』の梵文写本は、紙数で言いますと五三三枚あります。八行づつ両面に書かれています。この紙数の多い写本をわずか三、四ヶ月で笠原さんは書写しております。一字でも間違ふことのできない、大変集中力を必要とする仕事です。大谷大学図書館にこの書写した『俱舎論釈』が蔵されています。私は、それを見たことがあります、これほどの量の写本を三、四ヶ月で書写した努力に驚かされました。

『俱舎論釈』の書写に入ってから、笠原研寿さんは、ほとんど口を利かなくなりました。マックス・ミュラー先生と友人の南條文雄さんとは話しましたが、他の誰とも口を利きませんでした。新聞も読まず、娯楽もなく、毎日下宿にこもり、ただひたすら書写に専念しました。オックスフォードはロンドンより北になり、非常に寒いところです。そうゆう寒いところで毎日毎日、書写を続けました。そのために、とうとう体を悪くしてしまします。胸を患いました。マックス・ミュラー先生の勧めでロンドンの医師に診てもらうと、医師は彼に帰国するよう勧めました。笠原さんは、研究を半ばにしてオックスフォードを去る決意をしました。残念であったと思います。

オックスフォードを去る直前、笠原研寿さんは、準備した『ダルマサングラハ』の校訂をマックス・ミュラー先生に提出しました。これが、彼の最後の仕事になりました。南條さんは、学友が病気でやむなく帰国することを悲しみ、ロンドンまで見送りますが、これが、同じ使命を抱いて苦労した学友との永遠の別れになりました。笠原研寿さんの最後の様子について、マックス・ミュラー先生は、『ダルマサングラハ』出版本の序文に引用した自叙伝の中で、このように書いています。

「彼のオックスフォード滞在の最後の年に、彼は病苦を訴えることはなかったが、彼に身体の不調の徴候があることに私は気づいた。医者に診てもらおうよう彼に勧めた。医者は、即刻、私の若き友は結核症が悪化していると

診断し、帰国するよう忠告した。彼はたじろぐことはなかった。彼が、「そうなんです。私の国の人々は沢山肺病で死んでいるのです」と語った静かな口調が、今でも私の耳に聞えるのである。しかしながら彼は、セイロンに旅行して、しばらくそこで過ごし、学識ある仏教僧たちに会い、南方仏教と北方仏教を大きく分けているその相違点について彼等と語り合うくらいは充分できたのである。

しかし、日本に帰ってから、彼の病氣は急速に悪化した。私に数通の心のこもった手紙をよこし、そこには彼が研究できなくなった苦情だけを訴えていた。彼の感情の抑制力は驚くべきものであった。彼が私のところを去るとき、彼の青白い顔はいつものように平静であった。それで、彼の心の中の動揺を私はほとんど読みとることができなかった。しかしながら、彼が立去ってから、彼は私の家を何回も何回も見ながら、しばらくの間、道路を行ったり来たりしていたのを私は知っているのである。彼は私の家で、彼の生涯のうち最も幸福な時を過ごした、と言っていたからである。だが、私たちは、彼にはほんの少しのことしかやってあげられなかった。ただ一度、彼の最後の手紙で、彼は自国では孤独であると訴えていた。「病人には、友達もなくなってきました」と、彼は書いている。この手紙を書いて間もなく、彼は亡くなったのである。そして葬儀は、東京にて一八八三年七月十八日にとり行なわれた。」

使命を充分果すことができず、やむなく帰国した弟子の最後の様子を語るマックス・ミュラー先生の記事には、弟子に対する大きな期待と深い愛情があふれています。

笠原研寿さんがイギリスを発ったのが明治十五年（一八八二年）九月十二日であります。途中、スリランカに二十日あまり滞在し、同年の十一月に帰国しています。熱海で療養しましたが、快復することなく、翌年、明治十六年（一八八三年）七月十六日、東京大学付属病院で三十二才の若い生涯を閉じました。

笠原研寿さんが亡くなる十五日前の六月二七日に書いた南條文雄さん宛の手紙は、八月末にとどいています。友人

の死を知らずにその手紙を読んでいたのです。彼の計報がオックスフォードにとどいたのは、二ヶ月後の九月二十日でありました『懐旧録』一五六頁。

同じ志を抱いて辛苦をともした南條文雄さんの悲しみは、言葉では言い表わすことができません。教え子の計報に接したマックス・ミュラー先生は、その日の日付で、ロンドンタイムス新聞に追悼文を書かれました。日本で言うならば、朝日新聞のような大きな一流新聞であります。それに、名もない弟子の追悼文を書かれたのです。笠原研寿さんに対するマックス・ミュラー先生の思い、期待は、はかり知れないほど大きなものでありました。

マックス・ミュラー先生の書かれた追悼文は格調高い名文であります。先生の父親ウィルヘルム・ミュラーはドイツの有名な詩人でしたので、先生も文学的才能にめぐまれていました。皆さん、追悼文を一度英文で読んでみて下さい。私の拙い和訳ですが、ここにその一部を読ませていただきます。

「日本からとどいた最近の手紙によって、私の若き友であり、教え子である笠原研寿君の計報が伝えられてきた。彼の名は英国ではほとんど知られていないけれども、彼の死をそのまま見過してはおけないのである。ラスキン氏（近世美術批評家、オックスフォード大学の美術教授）がこのように言っているのは本当に真実である。「われわれのために書き残しておく必要のある伝記とは、世間が思いもせず、ほとんど耳にすることもなく、それでいて、世の仕事の最も多くをなしている人々のそれであり、そしてまた、どうすれば最もよく世の仕事がなされるかをわれわれに教えてくれる人々の伝記である」と。

私の仏教徒の友である彼の生涯は、目的に一身をささげ、しかし果されずに終った多くの人々の生涯の一つであって、われわれを驚嘆させ、深く悲しませるものである。それはあたかも、色あざやかな花をいっぱいにつけた庭の若い果樹が、時期おくれの霜に降られて、その美しさと果実を待つ楽しみが、すべて突如として、もぎ取られたのを見て、驚き、悲しむかのようなものである。」

追悼文には続いて、笠原研寿さんは南條文雄さんとともに英国に来て、ロンドンで英語を勉強した後、オックスフォードでマックス・ミュラー先生のもとでサンスクリットを学んだこと、最初は彼等の進歩は遅々たるもので、時には絶望したことなどが書かれています。そして、「しかし、彼等は絶望しなかった。そして遂に彼等はその報いを手にしたのである」と記されています。

次に、「オックスフォードにおける笠原君の日常は非常に単調なものであった。……」という、『ダルマサンクラハ』の序文に引用された自叙伝と同じ文章が続きます。ほとんど同文ですが、追悼文を自叙伝に転載するとき、ほんの少しですが、短い文章が挿入されています。

追悼文の最後は次のように書かれています。

「彼はいくつかの原稿を残して亡くなったが、それを私は準備して出版したいと思っている。とくに、龍樹に帰せられている仏教術語集である『ダルマサンクラハ』の原稿の出版についてである。しかしながら、実を結ばない数年間もの彼の仕事のことを思うと心が痛むのである。さらに、善良で、ものごとをよく理解しているあの一人の仏教僧が、三千二百万人の日本の仏教徒の中にあつて、生きていたら、どれほどの偉業をなしたであろうかと考えることは、もっとつらいことである。魂よ、やすらかに。」

先年、私たちが一緒に、モールヴェルンの丘から莊嚴な入日を眺めた時の様子を、私はよく思い出したのである。西方の空は、金色のカートンのように、われわれの知らない世界をおおい隠していた。「あれこそが、私たちが極楽の東の門と呼んでいるものののです」と、彼は私に話してくれた。彼は極楽を欣求していた。極楽で、彼を愛してくれた人たち、そして彼が愛した人たちに会えるのである、と彼は信じていた。極楽で無量光なる阿弥陀仏を拝するのである、と堅く信じていた。」

モールヴェルンの丘から赤く輝く入日を眺めながら語りあうマックス・ミュラー先生と笠原研寿さんの姿が目には浮

びます。弟子に対する深い愛情と、サンسكريット仏典を日本に伝えるという弟子の使命感に対する深い理解の中から、このような心のこもった美しい文章を先生は綴ったのです。

笠原研寿さんの大きな志は半ばで終り、とうとう実を結ぶことができませんでした。しかし、笠原さんが書写した仏典が一粒の種となって、日本における近代仏教研究の芽が出てきたのであります。近代仏教研究の創成のための種を播いた学徒として、笠原さんはその大きな使命を果たしたのであります。南條先生はその後、仏教研究において偉業をなしとげられましたが、南條先生の輝かしい業績の背後には、笠原研寿さんの協力があつたことを忘れてはなりません。

南條文雄、笠原研寿のお二人は、漢訳仏典の原典であるサンسكريット仏典を学び、それを日本仏教に伝えたいという大きな使命を抱いてイギリスに留学しました。当時、日本にまだ知られていないサンسكريットの原典によってブッダの教えを正しく学び、それを日本の仏教にもたらそうという大きな使命をお二人は持っていたのです。彼等の使命は、求法のためのものであつたのです。お二人は明治の求法僧であつたのです。それは、インドの仏教を正しく中国に伝えるために苦難の長い旅をした玄奘三蔵のようであります。

玄奘三蔵は、ナーランダ学問寺で七年間滞在し、高德のシーラバドラ（戒賢）法師のもとで、『瑜伽師地論』など、まだ中国に伝えられていない論書を学びました。これらの論書をどうしても中国に伝えてもらいたいとするシーラバドラ法師は、玄奘三蔵の指導に専念しました。玄奘三蔵の求法の精神と、シーラバドラ法師の法を伝えようとする願いとが一つになって、玄奘三蔵によって、多くの仏典が中国にもたらされたのであります。求法の志が大きな実を結んだのであります。

南條、笠原のお二人とマックス・ミュラー先生との出会いは、玄奘三蔵とシーラバドラ法師との出会いと全く同じであります。最初、サンسكريットを学び始めたころは、何のために二人がオックスフォードまでわざわざ来たのか、

マックス・ミュラー先生は理解できませんでした。ところが、やがて、燃えるような求法の使命感がマックス・ミュラー先生に伝わると、先生もそれに応えて、彼等二人と仏典を読むことに専念されるのです。いつの間にかマックス・ミュラー先生に彼等の使命感がのり移り、サンسكريット仏典を彼等に正しく伝えなければならないと思うようになったのです。マックス・ミュラー先生も彼等の求法の使命を共有したのであります。サンسكريット仏典を日本に伝えるという使命を。マックス・ミュラー先生の自叙伝、先生が教え子の笠原研寿さんを悼んで書かれた文章の中にそれを読みとることが出来ます。南條さん、笠原さんの求法の心と、マックス・ミュラー先生の心とが一つになったのです。これによって、笠原さんの書写した仏典が日本にもたらされ、南條先生の偉業がなしとげられたのであります。

最初に申し上げましたが、今から三十年前、留学先のナールンダ仏教研究所で私は笠原研寿さんをたたえるマックス・ミュラー先生の文章を読みました。その時の感動が今でも私の心から消え去っておりません。求法僧としての使命に燃え尽きた笠原研寿さんのことを思うと、いつも、あの時の感動が蘇ってきます。

研寿碑や求法のこころ語りつぐ

象 友

（本稿は、一九九〇年五月十五日に行われた仏教学会の新入会員歓迎会に於ける学会長・長崎法潤教授の講演筆録をご本人に加筆訂正して頂いたものである。）